

《目次》

- [01] 巻頭言
- [02] 研究最前線
- [03] 第14回大会のお知らせ
- [04] 博士論文情報

[01] 巻頭言

期待される学会活動

阿部圭子 (社会言語科学会理事 / 共立女子大学国際文化学部)

社会言語科学会のニュースレターは、今回から電子配信を始めました。IT技術の発達は、学会運営や大会準備などの至るところに多様な変化をもたらしています。

思い起こせば社会言語科学会も短期間にずいぶん大きな組織になったことを改めて感じます。社会言語科学会としての発足は6年前の1998年ですが、そもそもは、1987年に社会言語学ワークショップとして始まり、以降1994年に発足した社会言語学研究会を経て、現在の学会となったものです。そして、会員数も約1,000人を数え、研究大会の中身も研究発表中心の形態から、現在では招待講演、テーマ講演、シンポジウム、ワークショップ、ポスター発表を加えて多岐に渡っています。また、学会の将来を考える「未来を作る会」が学会内からの活性化とすれば、昨年度は、人工知能学会とポスターセッションの共催を行うなど、関連領域との連携も着々と拡大しています。

このように、最初の社会言語学ワークショップの頃から考えると、現在の学会の様子は隔世の感があります。これは、社会言語科学という学問分野が、時代の求める分野として多くの方々のニーズに適合し、初代会長であった徳川宗賢先生が看破した「共和国型学会」が、まさに実現したものと言えるでしょう。

私は、今後の日本において学会はますます重要な存在になると考えています。現在、日本は大きな変化のうねりの中にあり、様々な社会システムが変容しようとしています。そして、社会の少子化、高齢化、グローバル化、IT化などがインパクトとなって、学会を取り巻く環境も今後、一層大きく変化してくるでしょう。とりわけ、大学の問題や企業との関わりなどが学会にとって大きなテーマとなってくると思います。学会や研究活動は、社会と断絶した閉鎖的環境の中で行われるべきであるとする意見も多くあると思いますが、恐らく、今後は日本の学会、特に社会言語科学会は社会との関係性を今以上に持つことになっていくことでしょう。

私にとって学会活動は、大きな楽しみでもあります。毎年いくつかの国際学会に出席していますが、心に残る思い出がたくさんあります。ヨーロッパの学会では、出席者全員が学生寮に寝泊りし、世界的に著名な研究者と、まるで学生時代に戻ったかのように、毎晩食堂で談笑したこと。アメリカ、ラスベガスの学会では、カジノで他の参加者と並んでスロットマシンに興じたこと。何事にもおらかなスペインでは、タイムテーブルがなさそうなのにプログラムをこなし、ちゃんと予定どおり終了していたこと。このように、私にとっての国際学会は、海外の研究活動に刺激を受けたり、同じテーマを追究している研究者との出会いがあったり、なごやかな朝食が共同研究のきっかけとなったりと、研究生活の大きな部分を占めています。

社会言語科学会も、今後は海外の参加者たちにとって、参加するのが楽しみな国際的学会として活発な異文化交流を実現できる場となることを期待します。

社会言語科学会、研究の孵卵器

松本功（ひつじ書房）

私は、ひつじ書房という言語研究の出版社の発行人をしている。研究者ではなく、編集者・経営者である。学術出版社という立場上、研究のそばにいるわけで、そんな立場からの発言であるということをお許しいただきたい。

私が、ひつじ書房をつくったのは日本語学が勃興する時期（1990）であった。日本語学の中心は、文法研究であり、発行する分野も日本語の文法が中心であった。三上章や寺村秀夫の研究を刊行していたくろしお出版以外で、言語系で新しく出版活動をはじめたことに、多くの研究者の方からのご支援をいただくことができ、おかげさまで順調なスタートを切ることができた。その後、数年して、岩波書店や東大出版会が言語関連の講座を出しはじめるなど、大きな出版社からも書籍がはじめた。日本語の文法が、ジャンルとして定着したということである。

ジャンルとして定着するという点は、研究にとって大事なことであるが、それまで関係してきた新興の出版社にとっては、大手の出版社と競争するということになる。けっこうたいへんなことである。そのことに気が付いたのは、しばらくたってからのことで、もっとはやく気が付くことができれば、先を読むことができるかと胸をはることはできるが、残念ながらそうではなかった。ボンクラである。大手と競争しているということにやっと気が付いた時に、自分自身の出版人としての姿勢を振り返った。私自身が、日本語の文法研究ジャンルが確定すれば、出版社の経営も安泰になるということ、安泰を期待していたのではないかと。もともと、勃興中のジャンルに勝負を掛けて、出版社をつくったのに、そのような冒険心を捨てて、安泰を望み、そのことが、敗因なのではないか。規模や歴史やブランドでは競争しても負けてしまうのに、弱みをきちんと認識していなかった。そうであるなら、大きな出版社に負けて当然である。

小さな学術出版社として何ができるのか、何をすべきなのかを考え直すことになった。それは小さな出版社ならではの強みを再確認することでもあった。その時に、もう一度、初心に戻ろう、と思ったわけである。1996年くらいまでは、研究の基準を統語論の実証性においていたが、それは着実で、正確な研究だろうと思ったからなのだが、もう少し未確実で、挑戦的なジャンルに関わろうと思直した。つまり、勃興中、あるいは、これから、重要になるだろうと思われるジャンルの研究にコミットしようとその時に思直したのである。

勃興中のジャンルという失礼なのかもしれないが、社会言語科学というジャンルはそういうジャンルなのではないだろうか。そのような信念のもと、（まだ出ていないのは大変申し訳ないのですが）講座社会言語科学を企画し進めてきている。ひじょうにおおざっぱに言うと、従来の言語研究は、反証可能性を軸にした近代的な科学への志向が強く、対象を狭めていたということがある。それに対して、もし、人間というものを扱おうと思うのなら、その枠にとどまっていることができない。人間というインターフェースは、抽象的ではないし、複雑である。言語のシステムということに関心があった人には、あまりに複雑な人間システムは対象にしにくいという点があったのだと思う。

しかし、人間という不思議なシステムは、関心を寄せるにたりる面白い研究分野であることはまぎれもないことである。さらに、テレビやインターネットなどの新しいメディアが生まれ、新しいメディアと人間との関係が生まれ、従来の人文科学系の研究があまりとらえられていない面白い現象 言語に関連する がおこった時に、新しい研究ジャンルとして研究を生み出すということが生まれるわけだが、そのような研究が言語に関わる研究であった場合、研究が生まれる場所は日本語学会や英語学会よりも、社会言語科学会の方が似合っているような気がする。社会言語科学会は研究の培養液であり、孵卵器でもあるのではないだろうか。

そんな生まれつつあり、生み出しつつある学問の場所が、社会言語科学会であり、私としてはすぐそばにいたいと思っている。

[03] 第 14 回大会のお知らせ

プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。
<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/jass/14/>

【日時】2004年9月4日(土), 5日(日)

【場所】東京大学 本郷キャンパス 法文1・2号館

<http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/campus/map/map01.html>

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

交通: 東大前駅(南北線)から徒歩7分

本郷三丁目駅(丸の内線・大江戸線), 根津駅(千代田線)から徒歩12分

【費用】(事前登録は不要です。直接会場へお越し下さい)

会員 = 1,000円 非会員 = 3,000円 非会員学生 = 2,000円

大会発表論文集 = 2,000円

< 親と子の部屋の設置・手話通訳の手配について >

第14回社会言語学会大会にお子様を連れてこられる方には、「親と子の部屋」の設置が可能です。また、手話通訳の手配もいたします。利用ご希望の方は<jass@grp.rikkyo.ne.jp>(大会委員問い合わせ先)までご連絡いただきますようお願いいたします。お申し込みは、手配の都合上8月25日(水)までをお願いいたします。

< 社会言語科学の未来を作る会 第5回集会のお知らせ >

日時: 2004年9月4日(土) 20:00 (懇親会終了後) ~

場所: 本郷三丁目付近 (20:00に懇親会場受付前集合)

主催: 社会言語学会企画委員会

[04] 博士論文情報

(2004年1月27日~7月21日受付分)

『台湾に残存する日本語の実態』

簡月真(カンゲッシン) sun0912@hotmail.com

大阪大学大学院文学研究科 博士(文学) 2003年12月

『日本語音声談話の韻律構造』

佐々木(原)香織 sloth_sasaki@yahoo.co.jp

東京外国語大学大学院地域文化研究科 博士(学術) 2004年1月

『異文化間交流の実践的研究: 滞日留学生と日本人の会話における相互行為分析』

吉川友子 yoshikawatomoko@hotmail.com

大阪大学大学院言語文化研究科 言語文化学博士 2004年6月

発行: 社会言語学会事務局

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部加藤研究室気付

電話/FAX: 044-911-0689

E-mail: mem@jass.ne.jp, URL: <http://www.jass.ne.jp>